

神神の微笑

芥川龍之介

青空文庫

ある春の夕、^{ゆうへ} Padre Organitino はたった一人、長いアビト（^{ほうえ}法衣）の裾^{すそ}を引きながら、南^な蛮寺^{まんじ}の庭を歩いていた。

庭には松や檜^{ひのき}の間に、薔薇^{ばら}だの、橄欖^{かんらん}だの、月桂^{げっけい}だの、西洋の植物が植えてあつた。殊に咲き始めた薔薇の花は、木々を幽^{かす}かにする夕明^{ゆうあか}りの中に、薄甘^{うすあま}い匂^{におい}を漂^{ひら}わせていた。それはこの庭の静寂に、何か日本^{にほん}とは思^{おも}われぬ、不可思議^{みりよく}な魅力^{みりよく}を添^そえるようだった。

オルガンティノは寂^{さび}しそうに、砂^{すな}の赤い小径^{こみち}を歩きながら、ぼんやり追憶^{おひしょく}に耽^たつていた。羅馬^{ロオマ}の大本山^{だいほんざん}、リスポアの港^{みなと}、羅面^{ラベイカ}琴^ねの音^ね、巴旦杏^{はたんきょう}の味^{あじ}、「御主^{おんあるじ}、わがアニマ

（^{いぎよう}靈魂）の鏡」の歌——そう云う思い出^ではいつのまにか、この紅毛^{こうもう}の沙門^{しゃもん}の心^{こころ}へ、懐^かを唱^{とな}えた。が、悲^{かな}しみは消^きえないばかりか、前^{まへ}よりは一層^{いちじやう}彼の胸^{むね}へ、重^{おも}苦^くしい空^{くわ}気を拈^ねげ出した。

「この国の風景は美しい——。」
オルガンティノは反省^{はんしやう}した。

「この国の風景は美しい。気^き候^{こう}もまず温^{ぬる}和^わである。土^{つち}人は、——あの黄^{こう}面^{めん}の小人^{こびと}よりも、

まだしも黒ん坊がましかも知れない。しかしこれも大体の気質は、親しみ易いところがある。のみならず信徒も近頃では、何万かを数えるほどになった。現にこの首府のまん中にも、こう云う寺院が聳そびえている。して見ればここに住んでいるのは、たとい愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？ が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスポアの市まちへ帰りたいたい、この国を去りたいと思う事がある。これは懐郷の悲しみだけであろうか？ いや、自分はリスポアでなくとも、この国を去る事が出来さえすれば、どんな土地へでも行きたいと思う。支那しなでも、沙室シャムでも、印度インドでも、——つまり懐郷の悲しみは、自分の憂鬱の全部ではない。自分はただこの国から、一日も早く逃れたい気がする。しかし——しかしこの国の風景は美しい。気候もまず温和である。……」

オルガンティノは吐息といきをした。この時偶然彼の眼は、点々と木かげの苔こけに落ちた、仄ほの白い桜の花を捉とらえた。桜！ オルガンティノは驚いたように、薄暗い木立ちこだの間を見つめた。そこには四五本の棕櫚しゆろの中に、枝を垂らした糸いと桜ざくらが一本、夢のように花を煙らせていた。

「御おん主あるじ守らせ給え！」

オルガンティノは一瞬間、降魔ごうまの十字を切ろうとした。実際その瞬間彼の眼には、この

夕闇に咲いた枝垂桜が、それほど無気味に見えたのだった。無気味に、——と云うよりもむしろこの桜が、何故か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだった。が、彼は刹那の後、それが不思議でも何でもない、ただの桜だった事を発見すると、恥しそうに苦笑しながら、静かにまたもと来た小径へ、力のない歩みを返して行つた。

×

×

×

三十分の後、彼は南蛮寺の内陣に、泥鳥須へ祈祷を捧げていた。そこにはただ円天井から吊るされたランプがあるだけだった。そのランプの光の中に、内陣を囲んだフレスコの壁には、サン・ミグエルが地獄の悪魔と、モオゼの屍骸を争っていた。が、勇ましい大天使は勿論、吼り立つた悪魔さえも、今夜は靡げな光の加減か、妙にふだんよりは優美に見えた。それはまた事によると、祭壇の前に捧げられた、水々しい薔薇や金雀花が、匂っているせいかも知れなかつた。彼はその祭壇の後に、じつと頭を垂れたまま、熱心にこう云う祈祷を凝らした。

「南無大慈大悲の泥鳥須如来！ 私はリスポアを船出した時から、一命はあなたに奉って

居ります。ですから、どんな難儀に遇つても、十字架の御威光を輝かせるためには、一步も怯まずに進んで参りました。これは勿論私一人の、能くする所ではございません。皆天地の御主、あなたの御恵でございませぬ。が、この日本に住んでいる内に、私はいよいよ私の使命が、どのくらい難いかを知り始めました。この国には山にも森にも、あるいは家々の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。そうしてそれが冥々の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃のように、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまう筈はございませぬ。ではその力とは何であるか、それは私にはわかりませぬ。が、とにかくその力は、ちょうど地下の泉のように、この国全体へ行き渡つて居ります。まずこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥烏須如来！ 邪宗に惑溺した日本人は波羅鞞增（天界）の莊嚴を拝する事も、永久にないかも存じませぬ。私はそのためにこの何日か、煩悶に煩悶を重ねて参りました。どうかあなたの下部、オルガンティノに、勇氣と忍耐とを御授け下さい。——」

その時ふとオルガンティノは、鶏の鳴き声を聞いたように思った。が、それには注意もせず、さらにこう祈禱の言葉を続けた。

「私は使命を果すためには、この国の山川に潜んでいる力と、——多分は人間に見えな

い霊と、戦わなければなりません。あなたは昔紅海の底に、埃及の軍勢を御沈めになりました。この国の霊の力強い事は、埃及の軍勢に劣りますまい。どうか古の予言者のように、私もこの霊との戦に、……………」

祈祷の言葉はいつのまにか、彼の唇から消えてしまった。今度は突然祭壇のあたりに、けたたましい鶏鳴が聞えたのだつた。オルガンティノは不審そうに、彼の周囲を眺めまわした。すると彼の真後には、白々と尾を垂れた鶏が一羽、祭壇の上に胸を張つたまま、もう一度、夜でも明けたように鬨をつくっているではないか？

オルガンティノは飛び上るが早いか、アビトの両腕を拵げながら、倉皇とこの鳥を逐い出そうとした。が、二足三足踏み出したと思うと、「御主」と、切れ切れに叫んだなり、茫然とそこへ立ちすくんでしまった。この薄暗い内陣の中には、いつでもどこからはいって来たか、無数の鶏が充満している、——それがあるいは空を飛んだり、あるいはそこそこを駈けまわったり、ほとんど彼の眼に見える限りは、鶏冠の海にしているのだつた。

「御主、守らせ給え！」

彼はまた十字を切ろうとした。が、彼の手は不思議にも、万力か何かにか挟まれたよう

に、一寸とは自由に動かなかつた。その内にだんだん内陣の中には、檜火の明りに似た赤光が、どこからとも知れず流れ出した。オルガンティノは喘ぎ喘ぎ、この光がさし始めると同時に、朦朧とあたりへ浮んで来た、人影があるのを発見した。

人影は見る間に鮮かになつた。それはいずれも見慣れない、素朴な男女の一群だつた。彼等は皆頸のまわりに、緒にぬいた玉を飾りながら、愉快そうに笑い興じていた。内陣に群がった無数の鶏は、彼等の姿がはつきりすると、今までよりは一層高らかに、何羽も関をつくり合つた。同時に内陣の壁は、——サン・ミグエルの面を描いた壁は、霧のように夜へ吞まれてしまつた。その跡には、——

日本の Bacchandia は、呆氣にとられたオルガンティノの前へ、蜃気楼のように漂つて来た。彼は赤い篝の火影に、古代の服装をした日本人たちが、互いに酒を酌み交しながら、車座をつくつてゐるのを見た。そのまん中には女が一人、——日本ではまだ見た事のない、堂々とした体格の女が一人、大きな桶を伏せた上に、踊り狂つてゐるのを見た。桶の後ろには小山のように、これもまた逞しい男が一人、根こぎにしたらしい榊の枝に、玉だの鏡だのが下つたのを、悠然と押し立ててゐるのを見た。彼等のまわりには数百の鶏が、尾羽根や鶏冠をすり合せながら、絶えず嬉しそうに鳴いてゐるのを見た。そのまた向

うには、——オルガンテイノは、今更のように、彼の眼を疑わずにはいられなかった。——そのまた向うには夜霧の中に、岩屋いわやの戸らしい一枚岩が、どっしりと聳えているのだった。

桶の上ののつた女は、いつまでも踊をやめなかった。彼女の髪を巻いた蔓つるは、ひらひらと空に翻ひるがえつた。彼女の頸に垂れた玉は、何度も霰あられのように響き合った。彼女の手にとつた小笹の枝は、縦横に風を打ちまわつた。しかもその露あらしにした胸！ 赤い篝かがりび火の光の中に、艶つやつや々と浮うかび出た二つの乳房ちちぶせは、ほとんどオルガンテイノの眼には、情欲そのものしか思われなかった。彼は泥烏須デウスを念じながら、一心に顔をそむけようとした。が、やはり彼の体は、どう云う神秘のろいな呪の力か、身動きさえ樂には出来なかった。

その内に突然沈黙が、幻の男女たちの上へ降つた。桶の上に乗つた女も、もう一度正しょう氣きに返つたように、やっと狂わしい踊をやめた。いや、鳴き競つていた鶏さえ、この瞬間は頸を伸ばしたまま、一度にひっそりとなつてしまった。するとその沈黙の中に、永久に美しい女の声が、どこからか厳かに伝わつて来た。

「私わたしがここに隠こもつていれば、世界は暗闇になつた筈ではないか？ それを神々は楽しそうに、笑い興じていると見える。」

その声が夜空に消えた時、桶の上ののつた女は、ちらりと一同を見渡しながら、意外なほどしとやかに返事をした。

「それはあなたにも立ち勝った、新しい神がおられますから、喜び合っておるのでございます。」

その新しい神と云うのは、泥烏須デウスを指しているのかも知れない。——オルガンティノはちよいとの間あいだ、そう云う気もちに励まされながら、この怪しい幻の変化に、やや興味のある目を注いだ。

沈黙はしばらく破れなかった。が、たちまち鶏の群むれが、一斉いっせいに鬨ときをつくつたと思うと、向うに夜霧を堰せき止めていた、岩屋の戸らしい一枚岩が、徐ろおもむに左右へ開き出した。そうしてその裂さけ目からは、言句ごんくに絶とつた万道ばんどうの霞光かこうが、洪水のように漲り出した。

オルガンティノは叫ぼうとした。が、舌は動かなかつた。オルガンティノは逃げようとした。が、足も動かなかつた。彼はただ大光明のために、烈しく眩暈めまいが起るのを感じた。そうしてその光の中に、大勢おおぜいの男女の歓喜する声が、澎湃ほうはいと天に昇のぼるのを聞いた。

「大日靈貴おおひるめむち！ 大日靈貴！ 大日靈貴！」

「新しい神なぞはおりません。新しい神なぞはおりません。」

「あなたに逆うものは亡びます。」

「御覧なさい。闇が消え失せるのを。」

「見渡す限り、あなたの山、あなたの森、あなたの川、あなたの町、あなたの海です。」

「新しい神なぞはおりません。誰も皆あなたの召使です。」

「大日靈貴！ 大日靈貴！ 大日靈貴！」

そう云う声の湧き上る中に、冷汗になったオルガンテイノは、何か苦しそうに叫んだきりとうとうそこへ倒れてしまった。……………

その夜も三更さんこうに近づいた頃、オルガンテイノは失心の底から、やっと意識を恢復した。彼の耳には神々の声が、未だに鳴り響いているようだった。が、あたりを見廻すと、人ひと音とも聞えない内陣ないじんには、円天井まるてんじょうのランプの光が、さっきの通り朦朧もうろうと壁画へきがを照らしているばかりだった。オルガンテイノは呻うめき呻うめき、そろそろ祭壇まつ壇の後うしろを離れた。あの幻まぼろしにどんな意味があるか、それは彼にはのみこめなかった。しかしあの幻を見せたものが、泥烏須デウスでない事だけは確かだった。

「この国の霊と戦うのは、……………」

オルガンテイノは歩きながら、思わずそつと独り語ひとりごとを洩はらした。

「この国の霊と戦うのは、思つたよりもつと困難らしい。勝つか、それともまた負けるか、——」

するとその時彼の耳に、こう云う囁きを送るものがあつた。

「負けですよ！」

オルガンティノは気味悪そうに、声のした方を透かして見た。が、そこには不相変、灰暗い薔薇や金雀花のほかに、人影らしいものも見えなかつた。

×

×

×

オルガンティノは翌日の夕も、南蛮寺の庭を歩いてた。しかし彼の碧眼には、どこか嬉しそうな色があつた。それは今日一日の内に、日本の侍が三四人、奉教人の列にはいつたからだつた。

庭の檜欂や月桂は、ひっそりと夕闇に聳えていた。ただその沈黙が擾されるのは、寺の鳩が軒へ帰るらしい、中空の羽音よりほかはなかつた。薔薇の匂、砂の湿り、——一切は翼のある天使たちが、「人の女子の美しきを見て、」妻を求めに降つて来た、古

代の日の暮のように平和だった。

「やはり十字架の御威光の前には、穢^{けが}らわしい日本の霊の力も、勝利を占^しめる事はむずかしいと見える。しかし昨夜^{ゆうべ}見た幻は？——いや、あれは幻に過ぎない。悪魔はアントニオ上^{しようにん}人にも、ああ云う幻を見せたではないか？ その証拠には今日になると、一度に何人かの信徒さえ出来た。やがてはこの国も至る所に、天主^{てんしゆ}の御寺^{みでら}が建てられるであろう。」

オルガンテイノはそう思いながら、砂の赤い小径^{こみち}を歩いて行つた。すると誰か後から、そつと肩を打つものがあつた。彼はすぐに振り返つた。しかし後には夕明りが、径^{みち}を挟んだ篠懸^{すずかけ}の若葉に、うつすりと漂^{ただよ}っているだけだった。

「御主^{おんあるじ}。守らせ給え！」

彼はこう呟^{つぶや}いてから、徐ろ^{おもむ}に頭^{かしら}をもとへ返した。と、彼の傍^{かたわら}には、いつのまにそこへ忍び寄つたか、昨夜の幻に見えた通り、頸^{くび}に玉を巻いた老人が一人、ぼんやり姿を煙らせたまま、徐ろ^{おもむ}に歩みを運んでいた。

「誰だ、お前は？」

不意を打たれたオルガンテイノは、思わずそこへ立ち止まった。

「私は、——誰でもかまいません。この国の霊の一人です。」

老人は微笑を浮べながら、親切そうに返事をした。

「まあ、御一緒に歩きましょう。私はあなたとしばらくの間、御話しするために出て来たのです。」

オルガンティノは十字を切った。が、老人はその印に、少しも恐怖を示さなかった。

「私は悪魔ではないのです。御覧なさい、この玉やこの剣を。地獄の炎に焼かれた物なら、こんなに清浄ではない筈です。さあ、もう呪文などを唱えるのはおやめなさい。」

オルガンティノはやむを得ず、不愉快そうに腕組をしたまま、老人と一しよに歩き出した。

「あなたは天主教を弘めに来ていますね、——」

老人は静かに話し出した。

「それも悪い事ではないかも知れません。しかし泥鳥須もこの国へ来ては、きっと最後には負けてしまいますよ。」

「泥鳥須は全能の御主だから、泥鳥須に、——」

オルガンティノはこう云いかけてから、ふと思いついたように、いつもこの国の信徒に

対する、叮嚀ていねいな口調を使い出した。

「泥烏須デウスに勝つものはない筈です。」

「ところが実際はあるのです。まあ、御聞きなさい。はるばるこの国へ渡つて来たのは、泥烏須デウスばかりではありません。孔子こうし、孟子もうし、莊子そうし、——そのほか支那からは哲人たちが、

何人もこの国へ渡つて来ました。しかも当時はこの国が、まだ生まれただけだったので、支那の哲人たちは道のほかに、呉ごの国の絹だの秦しんの玉だの、いろいろな物を持つて来ました。いや、そう云う宝よりも尊い、靈れい妙みょうな文字さえ持つて来たのです。が、

支那はそのために、我々を征服出来たでしょうか？ たとえば文字もじを御聞きなさい。文字は

我々を征服する代りに、我々のために征服されました。私が昔知っていた土人に、柿かきの本もと

の人麻呂ひとまろと云う詩人があります。その男の作った七なな夕ぼたの歌は、今でもこの国に残つてい

ますが、あれを読んで御聞きなさい。牽けん牛ぎゆう織うし女じよはあの中に見出す事は出来ません。あ

そこに歌われた恋人同士は飽あくまでも彦ひこ星ぼしと柵たな機ばた津つ女めとです。彼等の枕まくらに響いたのは、

ちようどこの国の川のように、清あまい天あまの川がわの瀬せ音ねでした。支那の黄河こわうがや揚よう子す江こうに似た、

銀河ぎんがの浪音なみねではなかつたのです。しかし私は歌の事より、文字の事を話さなければなりません。

人麻呂はあの歌を記すために、支那の文字を使いました。が、それは意味のためよ

り、発音のための文字だったのです。舟と云う文字がはいった後も、「ふね」は常に「ふね」だったのです。さもなければ我々の言葉は、支那語になっていたかも知れません。これは勿論人麻呂よりも、人麻呂の心を守っていた、我々この国の神の力です。のみならず支那の哲人たちは、書道をもこの国に伝えました。空海、道風、佐理、行成——私は彼等のいる所に、いつも人知れず行っていました。彼等が手本にしていたのは、皆支那人の墨蹟です。しかし彼等の筆先からは、次第に新しい美が生まれました。彼等の文字はいつのまにか、王羲之でもなければ褚遂良でもない、日本人の文字になり出したのです。しかし我々が勝つたのは、文字ばかりではありません。我々の息吹きは潮風のように、老儒の道さえも和げました。この国の土人に尋ねて御覧なさい。彼等は皆孟子の著書は、我々の怒に触れ易いために、それを積んだ船があれば、必ず覆ると信じています。科戸の神はまだ一度も、そんな悪戯はしていません。が、そう云う信仰の中にも、この国に住んでいる我々の力は、臙げながら感じられる筈です。あなたはそう思いませんか？」

オルガンティノは茫然と、老人の顔を眺め返した。この国の歴史に疎い彼には、折角の相手の雄弁も、半分はわからずにしまったのだった。

「支那の哲人たちの後に来たのは、印度の王子悉達多です。——」

老人は言葉を続けながら、径ばたの薔薇の花をむしると、嬉しそうにその匂を嗅いだ。

が、薔薇はむしられた跡にも、ちゃんとその花が残っていた。ただ老人の手にある花は色や形は同じに見えても、どこか霧のように煙っていた。

「仏陀の運命も同様です。が、こんな事を一々御話するのは、御退屈を増すだけかも知れません。ただ気をつけて頂きたいのは、本地垂跡の教の事です。あの教はこの国の土人に、大日靈貴は大日如来と同じものだと思わせました。これは大日靈貴の勝でしょうか？ それとも大日如来の勝でしょうか？ 仮りに現在この国の土人に、大日靈貴は知らないにしても、大日如来は知っているものが、大勢あるとして御覧なさい。それでも彼等の夢に見える、大日如来の姿の中には、印度仏の面影よりも、大日靈貴が窺われはしないでしようか？ 私は親鸞や日蓮と一しよに、沙羅双樹の花の陰も歩いていきます。彼等が随喜渴仰した仏は、円光のある黒人ではありません。優しい威厳に充ち満ちた上宮太子などの兄弟です。——が、そんな事を長々と御話するのは、御約束の通りやめにしましょう。つまり私が申上げたいのは、泥烏須のようにこの国に来て、勝つものはないと云う事なのです。」

「まあ、御待ちなさい。御前おまえさんはそう云われるが、——」
オルガンティノは口を挟はさんだ。

「今日などは侍が二三人、一度に御教おんおしえに帰依きえしましたよ。」

「それは何人なんにんでも帰依するでしょう。ただ帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分悉達したあるた多の教えに帰依しています。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」

老人は薔薇の花を投げた。花は手を離れたと思うと、たちまち夕明りに消えてしまった。
「なるほど造り変える力ですか？　しかしそれはお前さんたちに、限った事ではないでしょう。どこの国でも、——たとえば希臘ギリシヤの神々と云われた、あの国にいる悪魔でも、——」

「大いなるパンは死にました。いや、パンもいつかはまたよみ返るかも知れません。しかし我々はこの通り、未だに生きています。」

オルガンティノは珍しそうに、老人の顔へ横眼を使った。

「お前さんはパンを知っているのですか？」

「何、西国さいこくの大名の子たちが、西洋から持つて帰ったと云う、横文字よこもじの本にあったので

す。——それも今の話ですが、たといこの造り変える力が、我々だけに限らないでも、やはり油断はなりませんよ。いや、むしろ、それだけに、御気をつけなさいと云いたいのです。我々は古い神ですからね。あの希臘ギリシヤの神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし泥烏須デウスは勝つ筈です。」

オルガンテイノは剛情に、もう一度同じ事を云い放った。が、老人はそれが聞えないように、こうゆつくり話し続けた。

「私わたしはつい四五日前まえ、西国さいこくの海辺うみべに上陸した、希臘ギリシヤの船乗りに遇あいました。その男は神ではありません。ただの人間に過ぎないのです。私はその船乗と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろの話を聞いて来ました。目一つの神につかまった話だの、人を豕いのこにする女めがみ神の話だの、声の美しい人魚にんぎよの話だの、——あなたはその男の名を知っていますか？ その男は私に遇あった時から、この国の土人になりました。今では百合若ゆりわかと名乗っているのです。ですからあなたも御気をつけなさい。泥烏須デウスも必ず勝つとは云われません。天て主教しゅきょうはいくら弘ひろまっても、必ず勝つとは云われません。」

老人はだんだん小声になった。

「事によると泥烏須自身も、この国の土人に変るでしょう。支那や印度も変つたのです。西洋も変らなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明りにもいます。どこにでも、またいつでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。……」

その声がとうとう絶えたと思うと、老人の姿も夕闇の中へ、影が消えるように消えてしまった。と同時に寺の塔からは、眉をひそめたオルガンテイノの上へ、アヴェ・マリアの鐘が響き始めた。

×

×

×

南蛮寺のペアドレ・オルガンテイノは、——いや、オルガンテイノに限つた事ではない。悠々とアビトの裾を引いた、鼻の高い紅毛人は、黄昏の光の漂つた、架空の月桂や薔薇の中から、一双の屏風へ帰つて行つた。南蛮船入津の図を描いた、三世紀以前の古屏風へ。

さようなら。ペアドレ・オルガンテイノ！ 君は今君の仲間と、日本の海辺を歩きなが

ら、金泥きんていの霞に旗を挙げた、大きい南蛮船を眺めている。泥鳥須デウスが勝つか、大日靈貴おおひるめむちが勝つか——それはまだ現在でも、容易よういに断定だんていは出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与うべき問題である。君はその過去の海辺から、静かに我々を見てい給え。たとい君は同じ屏風の、犬を曳ひいた甲比丹カピタンや、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでいても、新たに水平へ現れた、我々の黒船くろふねの石火矢いしびやの音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時があるに違いない。それまでは、——さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！ さようなら。南蛮寺のウルガン伴天連バテレン！

(大正十年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神神の微笑

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>